

イタイイタイ病の原因を突き止めた 小林 純



小林純（1909-2001）は明治42年11月1日に、倉敷市玉島黒崎で塩田を経営していた素封家の長男として生まれました。昭和6年3月に岡山六校を卒業し、東京帝国大学農学部農芸化学科に進みました。昭和9年3月に卒業後、農林省の農事試験場の助手となり、12年間ほど勤めました。昭和21(1946)年4月に郷里の倉敷にある財団法人大原農業研究所の化学部主任として迎え入れられ、助教授、教授を経て、昭和50(1975)年4月に退官されるまで、ほぼ30年間、岡山大学で教育、研究に務められました。その間、昭和35年9月に名古屋大学から理学博士を授与されました。

小林純は“水博士”として世界に名が知られ、日本全国約500か所の河川、東南アジア11カ国約100河川の水質を分析し、大きな業績を残しました。特筆すべき業績は、イタイイタイ病の原因究明に貢献したことです。イタイイタイ病は富山県神通川下流で発生した骨を脆くする病気で、体中の骨折によって「痛い、痛い」と泣き叫ぶ患者から、地元の医師である萩野昇が名づけました。この病気は、産後の婦人がかかりやすく、一旦かかると、直らない原因不明の奇病とされていました。しかし、小林純は農林省時代に鉱毒水による農業被害調査に携わったことがきっかけで、萩野医師と協力して、その原因が、上流にある三井神岡鉱業（岐阜県）の鉱山から流される排水に含まれていたカドミウムであることを突き止めた。小林はまず河川の水を大原農研にあった当時の最新機器を用いて分析

し、他の河川の水より、カドミウムの濃度が異常に高いことを見つけました。その後、土壌やコメ、患者の骨からも高濃度のカドミウムを検出しました。さらに小林は生体内に含まれる重金属の分析法を学ぶために渡米し、3か月間滞在しました。帰国後、動物実験を行い、カドミウムとイタイイタイ病の因果関係を明らかにしました。これらの成果は50年間不明であったイタイイタイ病の原因を解明しただけではなく、日本初の公害病の認定や裁判の勝訴に大きく貢献しました。なお、イタイイタイ病の原因究明には小林、萩野の他にもう一人、倉敷の農業指導家・吉岡金市も大きく貢献されました。小林はこれらの業績が認められ、昭和33年に日本農学賞、昭和56年に勲三等旭日中授賞などを受賞されました。

小林純は地味でコツコツ頑張るタイプです。趣味はドライブと写真撮影だったそうです。外国旅行中に撮影した写真で自宅で映写会をされていたほどです。また健康に対するカルシウムの重要性を力説し、ご自身が毎日炭酸カルシウムの粉末を2グラム飲み続けました。これは91歳まで長生きできた秘訣かもしれません。

国際貢献のために、小林は小林外来留学生奨学財団を設立し、諸外国からの留学生の勉学を援助し続けました。

平成13年7月2日に東京で91年の生涯を閉じられました。
(馬 建鋒 元分館長編集)